

Viator

VOL.31

御復活おめでとうございます

北白川教会主任司祭ウィリアム神父

聖ヴィアートル北白川教会の皆さん、よくこんな表現を耳にします。「年月は次々に改まる、だがそれは似て非なるもの」。この2年間、わたしたちはCovid-19のただなかにいました。そして、新しいオミクロンの変種がクリスマスに存在感を示し、わたしたちキリスト者にとって重要なこの時期に教会は閉鎖を余儀なくされ、この状況が弱まることはなさそうです。

親愛なる小教区の皆さん、とても美しく聖なる日を、すばらしい御復活のお祝いをするために、皆さんに喜んで申し上げる言葉があります。

昨年は、信徒にとってこのような大切な日に集う喜びを、まったく味わうことができませんでした。今年はそれが可能になり、たいへんに喜んでます。

親愛なる友人の皆さん、親愛なる小教区の皆さん、この御復活の週末を楽しんでください。公衆衛生上の危機が続き、私たち一人一人は疲弊し、肉体的・精神的な疲労による試練を受けていますが、どうかわずかなりとも、力を取り戻すことができますように。もちろん、どのような形であれ、この病気に罹患したすべての人々、そしてウイルスとの闘いや患者さんのケアに最前線で取り組んでいるすべての人々のことを、私たちはまず第一に考えています。

私たちがキリストの復活を宣言するのは、キリストの光が私たちの存在の暗い瞬間を照らし、それを他の人々と共有することができるからなのです。また、笑う人と共に笑い、泣く人と共に泣き、悲しい人や希望を失いそうな人に寄り添い、幸せを求める人に自分の信仰の経験を伝えることがで



きるからなのです。そしてその時にこそ、イエスは復活したのです。

小教区の役員会ならびに、私自身の名において、この復活祭での霊的刷新をお祈りします。

御復活おめでとうございます。

インドネシアの教会

ジェアン K.P.

2021年のデータによると、インドネシアではカトリック信者はおよそ842万人であり、国民全体の3.09%を占めている。他の国と同様に、カトリック教会は司教区、教区、軍事教区、小教区に分かれている。インドネシアには、10の大司教区、27の司教区、1つの軍事教区、1318の小教区がある。インドネシアは広いため、遠隔地や小さな地域には教会がないこともある。そのような場所には、Stasi（英 Station）というものがある。教会がないため、村の集会所でミサなどが行われている。Stasiでの人が増えたら、一つの教会になることもある。要するに、Stasiは教会の先駆と言えるだろう。

インドネシアの教会のならではのシステムと言えば、同じ教会に属している人々が住んでいる場所によって、いくつかのサークルに分かれていることである。一般にサークルには聖人の名前が付けられている。サークルで人々は仲良くなり、様々な活動を行う。例えば、聖母月（5月）とロザリオの月（10月）にそれぞれのサークルで毎週誰かの家に集まり、ロザリオの祈りをする。また、9月の聖書月に一緒に聖書を読んだり、分析したり、意見を交換したりする。さらに、イースターとクリスマスの準備としての黙想会は1ヶ月前から毎週開催される。このよ

うなシステムは、使徒行伝に含まれている初代教会に触発されたものである（使 2:41-47、4:32-37）。これは、カトリック信徒の信仰を強化し、教会を発展させるための努力でもある。

ミサは平日の朝と土曜日の夜と日曜日である。人が多いため、日曜日にミサを4回行う教会もある。小さな子供からお年寄りの方々までミサに参加する。ミサの担当者は日本とほぼ同じだが、数がより多い。そして、ミサ以外に教会で行われる活動は沢山ある。例えば、子供の信仰教育、青年会、年配の会、スピリチュアルセミナー、および様々なスキルコースなどがある。インドネシアでは若者が活発で、教会への貢献が大きい。教会のミサの時は穏やかだが、その後に賑やかな雰囲気を感じられる。

コロナの影響で、すべてのミサと活動はオンラインになった時がある。しかし、今は段々復活している。ミサは対面とオンラインで開催され、対面で参加したい場合には、オンライン登録が必要である。しかし、パンデミックの間には教会に集まることができない。コロナが早く収まり、世界中の教会が正常の活動に戻り、キリストの言葉をより多くの人々に広められるように願っている。

ベリーニ神父様の思い出

バプテスマのヨハネ F.A.

2020年の被昇天のお祝い日に、ベリーニ神父様が天に召されて、1年半余りが過ぎた。二度目の

がんが進行して、入院されたという連絡を受けていたが、COVID-19の感染拡大のために、どこの

病院も家族の面会さえ制限しているという時期だった。ベリーニ神父様に出会って 20 年余り、随分お世話になったが、最期はお目にかかることもかなわなかった。前夜式と告別式で、対面したベリーニ神父様は、生前の面影が感じられないほど痩せておられた。眼鏡を外されていたせいかもしれないが、棺の中のベリーニ神父様は別人のようで、お別れをしたという実感はなく、今もどこかへ行かされているだけで、お会いできそうな気がしている。

ベリーニ神父様に出会ったのは、プロテスタントの教会からカトリック教会に転籍して間もなくで、北白川教会に通い始めた頃だった。私は当時、教会の近くの小さな看護学校で働いていた。キリスト教主義の学校だったから、毎朝 15 分間の礼拝で始まり、キリスト者であるなしに関わらず、年に一度は、教職員にも学生にも礼拝担当がまわってきて、聖書の箇所を選んで、各自、思いを語ることが求められた。日常の中で幅広くキリスト教を知ることが目的に、プロテスタント・カトリックを問わず、市内の司牧者の方々も礼拝を担当されていた。その一環で、ベリーニ神父様にもお願ひすると、「イエスのために、働くのは喜び」と快く承諾してくださった。

15 分の礼拝時間のうち、メッセージを伝える時間は 5 分程だったが、ベリーニ神父様のお話はいつも 5 分ではおさまらなかった。ベリーニ神父様にお願ひする時は、前奏も讃美歌も短くして、メッセージに 10 分は確保できるようにしたが、それでもおさまらず、ハラハラした。イエス様のこと、キリスト教のこと、伝えたいことがあふれるほどあると感じた。日本語をイタリア語のように話されるそのスピードに、学生たちの理解がついていったとは思わないが、チャイムが鳴って時間が経ったことに気づかれる姿は、一生懸命でユーモラスで、学生たちはクスクス笑って楽しそうで、

ベリーニ神父様は人気だった。学校は数年前に閉校になり、礼拝後の数名の教職員とコーヒーと少しの会話の時間が、とても懐かしい。

北白川教会では、聖週間の典礼のベリーニ神父様が最も印象に残っている。ベリーニ神父様は、聖木曜日の典礼がとても好きだと言われていた。カトリック教会に転籍して初めての聖木曜日の典礼の前に、「一年の中で、一番清らかな夜が始まる」と言われたことが印象深い。そう言いながら、ベリーニ神父様は涙ぐまれていたようだった。

「きよしこの夜」は、クリスマスのイメージしかなかったから、「えっ？清らかな夜？泣くほど？」と思った。その後、聖書の洗足の場面を再現するように 12 人が集められ、ベリーニ神父様は、順に足を洗っていかれた。実際に、その場面を初めて見たときは衝撃で、「わたしの足など決して洗わないでください」と言ったペテロの気持ちがわかるような気がした。けれども、聖木曜日に集まる人はそう多くなかったから聖堂は静かで、流される水の音だけが聞こえる中で、衝撃は静まり、「清らか」の意味を思った。ベリーニ神父様が「清らか」と表現されたのは、弟子の足を洗うというイエスの謙り、その後の弟子たちの裏切りを知りながらの赦し、そして十字架上の死と復活までの過越の 3 日間で、普通にイメージする「清らか」とは違った。それは、愚かで罪深い人間に対する極みまでの神様の愛で、次元の異なる「清らか」の意味をベリーニ神父様は教えてくださったと思う。

最後の思い出は、COVID-19 のために教会が閉鎖される前まで、月に一度開かれていた広報部の勉強会だ。ベリーニ神父様は、勉強会のテキストは教皇フランシスコの『使徒的勧告 福音の喜び』で、数人で始まったが、友人を誘ったりして 10 人ほどが集まることもあった。参加者が輪読し、ベリーニ神父様が解説をされた。

参加者が質問したり、気に留まったことや自分の日常のことに関連して話をすることもあった。外に向かって開かれている教皇さまの言葉に「喜び」を感じる時間でもあった。一人では味わえないことを味わう時間で、参加者と知り

合う時でもあり、楽しかった。継続的に集まって、ゆっくり、キリスト者として学ぶことは、ミサと同じくらい意味があること、最後にそれを教えてもらったと感謝している。



長く美しい友情の物語

アルベルト、アゴスティノ、フランチェスカ（聖エジディオ共同体）

私たちがリノ・ベリーニ神父に知り合ったのは1987年8月初頭にはじめて来日したときでした。

1986年10月27日、教皇聖ヨハネ・パウロ二世はアッシジで平和のための歴史的な祈りを呼びかけました。そのとき始まった「アッシジの精神」を生き深めるため、翌年8月3・4日、仏教の天台宗によって第1回比叡山宗教サミットが開催されました。聖エジディオ共同体は、アッシジで日本の諸宗教の代表者に会っていましたが、比叡山サミットにも招待され4名が参加しました。来日に先立ち、諸宗教対話とアジアの専門家モンセニョール・ピエトロ・ロッサーノ（当時ラテラン大学学長）に相談すると、諸宗教対話に従事する何人かのキリスト者を訪ねるよう助言をくださいました。そのうちの一人がリノ・ベリーニ神父で、そのため彼に会いに行ったのです。

私たちの友情は33年間続きました。連絡を交わし来日の際に会って話をしました。聖エジディオ

共同体が推進する「平和のための祈りの集い」にもリノ神父は何度か参加しました。アゴスティノはよくスカイプで彼と話し、来日のたびに彼に会っていました。

リノには間違いなく友情に対する鋭い感受性がありました。会ったり話したりできるとわかるとすぐに、早くそうしたいと言いました。迷惑じゃないかと心配してくれましたが、同時に熱い思いをはっきり表現しました。繊細に気を配る人でしたが、堅苦しいのは嫌いでした。会うとすぐに本題に入り、さまざまな話題についての質問をたくさん浴びせました。しかし、後で、その話題を掘り下げ議論しました。何より、私たちの答えを聞く前に、すでに多くのことを知っていることがわかりました。彼と会うのはとてもすばらしく、時間と精神力が必要でした。彼の方から話を打ち切ったことは一度もありませんでした。ほとんどいつも私たちの方から、夜遅いとか、他に用事が

あるとかでいとまごいをしなければならなかったのです。

そうした会話から浮かび上がったのは、日本への大きな愛情です。どんな機会でも、日本とその文化や住民について教えてくれ、なんらかの啓発的なエピソードや有意義な出会いについて話してくれました。日本は彼の生きがいでした。彼は自分が宣教師として遣わされた地と一つになっていました。自分は、マルコ福音書第16章第15節の前半(「全世界に行って」)を聞いて、後半(「すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」)を聞くまで待たずにすぐに急いで出かけた人だと、皮肉と自己批判たっぷりによく言っていました。自分は、そう、遠くまで出かけたが、何をすべきかを本当はわかっていなかったと言ったのです。けれども、わかっていなかったわけではありませんでした。本当は、リノは何年も、しばしば孤独で困難な世界で生活していて、その世界に勇敢に向き合っていました。「すべての造られたものに福音を宣べ伝える」という責任を感じていましたが、歴史的にも文化的にも教会から遠く離れた世界でそれをしなければならないこともわかっていました。だからこそ、京都に居を構えたのです。京都は古くから日本の宗教の中心地だからです。そのためにも、深い諸文化・諸宗教対話を築かなければならないと心がけて、日本の宗教界との関係を気長に培いました。彼は仏教の大学で教職につけたことをとても大切にしていました。それは、尊敬と評価を得たことの確かなしるしでした。

何よりも彼が情熱を注いだ問題の一つは、祈りにどのような意味があるかを仏教や神道の人たちにわかってもらうことでした。宣教師としていつでも目覚めていて、教育現場で若い仏教僧たちに福音を説明する機会があることを喜んでいました。しかしまた、京都の一つの小教区 [=当教

会]での司牧的奉仕もとても大切にしていました。ごく少数派である日本のカトリック教会にはさまざまな問題があることがわかっていましたが、日本の教会をととても愛し、不当な苦しみを与えられても、いつも寛大に奉仕していました。

会ったときには、イタリアについても話題になりました。彼はイタリアのことをとても気にしていました。恋しかったわけではありません。リノは自分の出身国に戻ることを望んでいませんでした。生涯を捧げた日本に残ることをいつでも望んでいました。けれども、イタリアについてたずねることで、自分の青春期を形成し自分の召命を成熟させた歴史的脈絡を理解しようとしていました。そのうちの一つは68年闘争でした。闘争はじっさい、若いザベリオ会員たちのあいだにも入り込み、混乱をもたらしましたが、新しくより広い視野をも開きました。その意味でリノは自分が68年闘争の申し子と感じていました。他方、自分の家族の思い出話をするのも大好きで、子どもの頃から信仰生活に入ることができたのは家族のおかげだと言っていました。また、出身地の庶民の信心についてよく話しました。子どもの頃の思い出にまつわるアブルツォの聖地、サン・ガブリエレ・デッラッドロラータの話をよくしたのでした。

話をするとき彼はいつも、聖エジディオ共同体がアフリカや世界の他の場所でどんなことをしたかに興味をもっていました。しかし、聖エジディオの話と経験について会って話すとき、彼がいちばん知ろうとしていたのは教会全体がどこに向かっているかでした。そうすることで、遠く離れたところに住んでいるにもかかわらず、またたぶんそうだからこそ、深いかかわりを感じている教会との交わりをより強く感じようとしていたのです。

こうした話題に触れることになったとき、彼の

心臓がどこでいちばん鼓動しているかがわかりました。私たちは近年の教皇座について、パウロ6世、ヨハネ・パウロ2世、ベネディクト16世、フランシスコについて話しました。教皇たちの選取、大きな問題に対処する方法、彼らが表現した、または表現しているカトリック教会の時代がどのようなものかを彼は理解しようとしていました。

彼は多くの事柄についてすでに情報を得ていたため、私たちにはそれほど情報を求めていませんでした。それは持続的で強い関心のしるしでしたが、彼はむしろ、深く理解するため、直接経験

+++++

編集後記

今号は、ウィリアム神父様のあいさつ文と K.さんによるインドネシアの教会の紹介に加え、ベリーニ神父様についての二つの追悼文を掲載させていただきました。

一つは広報部のメンバーでもある A.F.さんが思い出を書いてくださった。もう一つは、ザベリオ宣教会のサイトに掲載されていたもの。執筆者の三名の方が所属する聖エジディオ共同体は、第二バチカン公会議後に起こった信徒運動の一つで、1968年にローマの一人の高校生アンドレア・リカルディとその仲間たちによって始められた。貧しい人々への援助に始まり、紛争地域での和平の調停にも成功してノーベル平和賞にもノミネートされたことがあるそうで、諸宗教対話や死刑廃止運動にも取り組んでいる。ベリーニ神父様との出会いについては追悼文に書かれているが、一人の方は確かローマの大学で近代ヨーロッパ史を担当する先生で、神父様はその方との会話を心から楽しんでおられ、満足そうに私にも報告し

できなかったことを把握するため、多くの疑問に対する答えを見出すために、私たちと話し合うことを望んだのです。時には疑問を呈し、反対を表明しましたが、それも教会への深い愛のしるしでした。

以上のように、私たちは今日、大きな愛情を込めてベリーニ神父のことを思い出し、彼がキリスト者として生きたこと、何より宣教師として真正な証をしたことを主に感謝します。

(<https://dg.saveriani.org/images/comunicazioni/pubblicazioni/defunti/profili/2020/inMEMORIAM2030-Bellini.pdf> より、翻訳は広報部。)

てくださっていた。神父様が諸宗教対話の活動を始められた初期の頃から、生涯を閉じる最晩年まで、継続して交友関係にあった方々だと思う。

教職を失ったあと和解のサインを待つ日々を、この方々のように親しい方々とのやり取りと当教会の司牧の手伝いをしながら、世界と教会の行方を見守ってすごしておられたベリーニ神父様。その知見の一端を広報部勉強会でもわかちあってくれたわけだが、今の世界情勢についてなんとおっしゃったのだろうか。もはや知るすべもないが、twitterなどで情報を追っていると、「私は裁判を受ける前に罰せられた」とおっしゃったことを思い出す。つまり、十分な検証を行う前に次々と制裁等がなされているのではないかと思われるのだ。

納骨堂に分骨していただいたことでもあるし、イエス様に心を合わせこの世での苦しみを終えられた神父様のとりつぎを祈る私である。

(マリア・ヨハンナ M.M.)

表紙画像は Wikimedia Commons より。

カトリック聖ヴィアートル北白川教会 2022年4月16日発行
ホームページ：<https://www.stviator-kcc.org/>